

金東華に依る「日蓮の「仏界縁起説」について」の訳注（上）

金 炳 坤

本稿は、金東華著『佛教學概論』（白映社、一九五四年）の「第二篇 法宝論（真理論）」の「第四章 縁起説（現象論）」中の「第六節 仏界縁起説」（二九四―三二六頁）に対する訳注である。

さて、仲澤浩祐博士（身延山大学第二代学長・立正大学名誉教授）が講義されていた立正大学仏教学部の「仏教史特講Ⅱ」を、筆者が担当するようになったのは二〇一二年のことである。何とか第一回目の授業を無事に終えた私は、そのことを報告するために、恩師の三友健容博士の研究室を訪ねた。いつもの笑顔で迎え入れてくださった三友先生は、食事でもしようかと、十二階の芙蓉峰（教員食堂）に連れていってくださり、そこでこう語られたことを今でも憶えている。「これで、立正大学の仏教学部において韓国籍として教壇に立ったのは、慧鏡君が三人目となる」と。その一人目こそが、本書の著者にして韓国仏教学の先駆者と称される、雷虚金東華博士（一九〇二―一九八〇）なのである。¹

東国大学校において名誉哲学博士学位を授与（一九六二年）された金東華博士は、三友先生の「日本・韓国佛教学交流の父金東華博士の

一考察」（『印度学仏教学研究』第五十一卷第一号、二〇〇二年）においても紹介されている通り、一九二八年（昭和三年）三月には立正大学専門部宗教科を、一九三二年（昭和七年）三月には立正大学文学部宗教学科を卒業して²、同年四月から一九三五年（昭和十年）三月までの三年間は「留学生及給費生」として奈良において法相を研究し³、その後、一九三六年（昭和十一年）から一九四〇年（昭和十五年）までの四年間は専任講師として「仏教学」の講義を担当されていたようである。⁴

そういえば、恩師の福士慈稔博士からは、三友先生の長きにわたる学部長時代の有終の美というのが、金東華博士より寺号を授かったというソウル的正覺寺（一九五八年創建）において法華経の布教に尽力された太虚光雨明師（一九二五―二〇一九）と共に、金東華博士が慧峰禪師（一八七四―一九五六、雷虚堂の師、太虚堂の父）の許で修学されたところ、即ち慶北尚州市の南長寺に「雷虚堂東華大宗師碑」を建立（二〇〇二年六月十日、除幕式は二〇〇三年三月二十八日）したことである、という話を伺ったことがある。

さらに加えれば、筆者にとって本書との出会いといえようか、二〇〇二年の留学に際して、恩師の大韓民国社団法人法華弘通會の申圓鏡法主より持たされた数冊の仏教書の中に、本書もあったことを思い出して不思議なつながりを感じたものである。それが、当時は読んでも何だかさっぱりであったものが、あれから十年ほど「天台学」を教え、教わってきた甲斐もあって、今では少しばかり咀嚼できるようになったことは有難き幸せである。

ところで、金東華博士に関しては、激動の時代を生き抜いてこられた方であるから、韓国の近代史においては種々様々なる評価のあることも事実である。⁽⁵⁾しかし現代史となれば、戦後の韓国における代表的な仏教学者として、仏教学樹立のために一心不乱であったこと、これもまた紛れもない事実である。

後者の評価を可能にする根拠の一つが、まさしく本書になるのであるが、私のような者が本書について美辞麗句を並べるよりも、先学たちの言葉を借りてこれを例えるならば、人物としては、中国において『漢魏兩晉南北朝佛教史』(商務印書館、一九三八年)を撰した湯用彤教授に、書物としては、日本における宇井伯壽博士の『佛教汎論』(岩波書店、一九四七―一九四八年)に評定されるとしたら、理解しやすくなるのではないだろうか。

とりわけ筆者が本節に限り訳注を手がけようとした所以は、「天台学」の教材研究の最中に、天台教学と日蓮教学の相異点について、天台三大部をはじめ、日蓮畢生の書である『開目抄』『観心本尊抄』ほ

か、時には吉蔵疏なども引きながら、最初に問いかけをし、読者と問題意識を共有しつつ、著者との距離を徐々に縮めてゆき、最後に答えを出す、といった所謂問答形式の中で、それが理路整然と論明されているところが、日蓮の天台観を教授する上で、適していると判断したからである。

このような視点を重視しつつ、本書並びに本節に対する筆者なりの歴史的意義を付与するならば、こと日蓮宗のことに關しては、佐野前勛(一八五九―一九二二)の働きかけによる「僧侶都城出入り禁止令」の解除(一八九五年)という例もあって、国内において次第に認知されるようになったものと考えられるが、それ以来、凡そ半世紀の間に、外国において出版された仏教学術書の中で、これだけ日蓮遺文を駆使している例が果たしてあるであろうか。

この類い稀なる事例は、おそらく博士が立正大学において宗学を専修されたからこそなした得た技であろうが、今度は、ほぼ同時代に祖山学院高等部において学んでいる(一九三〇年卒業)⁽⁷⁾もう一人の苦学僧、方哲源師(一九〇四―一九八一)の場合に比べてみても、博士の日蓮教学に対する造詣の深さは比類なきものがあるといえよう。ともかく、本節を一読すれば、博士が如何に日蓮教学に精通していたか、自ずと理解できるはずである。

これに付随する今後の研究課題として、金東華博士にあって、天台・日蓮教学形成の遍歴を辿っていくこと、つまりは如何なる先師の学説に依拠していたか、ということも、これまでにない着眼点になるであ

ろう。⁽⁸⁾この種の後続研究の活路を開くためにも、筆者にしかできない役割（訳注等）を果たしていくことにしたい。

以下、四項からなる本節の訳注を示すが、紙面の都合上、上（第三項まで）、下（第四項）に二分して発表することにした。

第一項 仏界縁起説の由来

仏界縁起という熟語は、いまだ仏教学界において広く知られていない。日本の学界においても二、三の学者に依って題目だけは使用されたことがあるけれども、理論的には紹介されたことがない。しかし思想教理、特に仏教を宗教的にみれば、重要な教理であるため、今これを考察しようとする。

この学説は日本の日蓮宗の宗祖である日蓮に依って主唱された思想であり、縁起説としては、最高段にある学説であるということができ

る。

日蓮は西紀一二二三（『二の誤り』）年二月十六日、日本の安房国、即ち現在の千葉県にあたる、一漁村（『小湊』）において漁夫の息子として誕生された。十二歳の時に出家（『清澄入山のこと』）して、十八（『六の誤り』）歳に得度したのであり、当時の仏教学問の道場である比叡山に赴き天台学を修学すること十二年、其の間に禪と密教と奈良六宗の教義も傍修したのである。

このように修学する中、日蓮には内外の二大疑問があつて、内には、

同一釈尊が説いた仏教がどうして日蓮当時のような八宗が各立して互いに自讃毀他するに熟是熟非して何宗の学説が果然釈迦世尊の根本精神を継承したのかということであり、外には、当時の日本国内が、内乱が続起して、また外寇が侵入して、天変地妖の自然の変乱までも尽きる日がなくて、国民が寧日を得られない現状であるに、これは何に起因するののかということであつた。

日蓮はこのような二大疑問を一切蔵経の中において解決を得ようとした。そうしてついに光明点を発見するに、第一に仏教はいくら諸経を所依とする諸宗が多いといえども、『妙法蓮華経』が諸経中の王であり、またこの経を所依とする宗が正當な宗であると看破したのであり、また国内に内乱・外寇が不絶する所以は、正法が流布されないで、邪法が得勢して、民心を誤つて引導するからであるとみたのである。

これで自信を得た日蓮は、建長五年、即ち西記（『紀の誤り』）一三五三年四月二十八日、彼が三十二歳の時に立教開宗するに、これが即ち日蓮宗である。開宗の趣旨は、扶教・安国の二大目的にあつたのであるに、仏教を扶立するには排邪顕正して正法を宣揚する外にその道がなく、また国家を安泰にするにも正法をもつて国民の邪曲された思想を善導することが最も根本的な方法であつた。

それではその正法が何であるか。一代諸経中『法華経』がそれであるという。この正法を宣伝するということは、既成宗団の勢力が堅固であつたその当時にあつては容易なことではなかつた。彼は破邪顕正する為めには「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」の所謂四箇格

言の利剣を振るうと同時に、国家に対しては「我れ日本の柱となろう、我れ日本の眼目となろう、我れ日本の大船となろう」⁽¹⁰⁾、『開目抄』『定遺』六〇一」という大自信（＝三大誓願）をもって、宗旨宣伝に折伏逆化の方法をもってした関係であろうか、または法華經の行者であることを証明する表示であろうか、「すでに二十余年間、この法門をひろめる中、日日、月月、年年に難が重なったのであるに、少少の難は数を知らない。大事の難が四度（松葉谷の焼打難、伊豆の流罪難、小松原の要撃難、佐渡の流罪難⁽¹¹⁾）であるが、二度は暫時すておき、王難がすでに二度に及ぶに、今度はすでに我が身命に及ぶ。その上、弟子や檀那、わずかでも法を聴いた者ならば、皆な重罰を行ずること、謀叛でもした者のようにする」⁽¹²⁾（『開目抄』五五七）とある通り、実に大難小難、無数の難に苛まれたのである。

五大部書

彼の思想を伝える著書としては多数があるが、その中で『立正安国論』『開目抄』『撰時抄』『報恩抄』『観心本尊抄』等は五大部と称するもので、重要なものである。このような諸書に依つてみれば、彼はただ法華經を弘布する為めにこの世上に出現して、また法華經の為に苦難の一生を送つたのである。

しかし法華經を弘布したことが日蓮の自負であるとすれば、支那においてはずで天台智者があつたのであり、日本においても伝教があつたのであるから、何を自負することがあろうか。その通りである、法

華弘通者であるという点においては皆な同一である。しかし末法時代に至り『法華經』の予言通りに法華經を耽読した者は、ただ日蓮一人だけである。そのみならず、今ここで論じようとする仏界縁起の義のようなものは、前代未聞、日蓮不共の甚深なる教理である。

第二項 諸法同体の原理

日蓮はどのような理由で一代諸經中にただ法華經だけを最勝なる經典であると信奉するか。

五重相對

日蓮は法華經の地位を明かそうと、内外、大小、権実、本迹、教觀等、『開目抄』所説の「五重相對」という規範をもって、從淺至深、捨劣取勝の過程をみせている。

一、内外相對というのは、儒教等の外道と仏教を相對させると、儒教は仏教に及ばぬ淺劣の教であるため、これを捨てて仏教を取るといふことである。

二、大小相對というのは、仏教内においても、小乗教と大乘教を比較すれば、小乗は淺略教で、大乘は深広教であるため、前者を捨てて後者を取るべきであるといふことである。

三、権実相對というのは、大乘教の中においても、また權大乘と実大乘との區別があるもので、權は方便權化の義、即ち仏陀が說法され

る中、出世の本懐である真実教に一切衆生を誘導する為めの方便的な説法の形式を取った経を指すものであり、実というのは、究竟真実の義をもって仏陀の本懐である真実教をいうもので、この両教の勝劣を比較すれば、実大乘が殊勝なることは多言を不要とするために、これを取るべきであるということである。

四、本迹相對というのは、一代諸経中の真実教である『法華経』二十八品中において、前十四品はこれを従本垂迹の教という意味から迹門と称して、後十四品は迹に対する本源という意味から本門と称して、この本門が殊勝であるということである。

五、教觀相對というのは、法華経本門上において、また教相門と觀心門に兩分して、教劣觀勝なるものであるため、觀心門を取るべきであるということである。

このような五重相對中、第三權實相對において、法華實教が諸経中、最勝経である地位を明かして、この実教である法華経上において、また本迹、教觀の二重相對をもって、法華経の深理と釈迦出世の本懐を指摘して、これをもって五濁惡世の末法時代に相應する宗教であると主張したのである。

法華経の二大要旨

それでは法華経が一代諸経中において実教である所以はどのような点にあるものか。もしその理由が明白でなければ、五重相對は無意味な規範になってしまうことになろう。疑心することなかれ、日蓮がど

うして無根之説をもって法華経だけを偏讀しようか。

日蓮は爾前諸大乘経の欠点を挙げていうには「華嚴乃至〔般若〕大日経等は、二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成も説かれなかつた。此れ等の諸経に二失があるに、「一、〔行布を存する故にかえつて権を未開するに〕迹門の一念三千を隠したのであり。二、〔始成をいう故にかえつて〕〔垂〕迹を未弘〔未発〕するに」迹門〔本門の誤り〕の久遠を隠したのである。此れ等の二大法は一代の綱骨、一切経の心髓である」⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾〔開目抄〕〔定遺〕五五二〔と〕。

一切衆生を残さずに救済することが大乘仏教の根本精神である。ところが、法華爾前の諸経の大乘経においては、二乗作仏の原理と釈尊の久遠実成の義が説かれていないのである。一代藏経に、たとい千言万語が羅列されており、またいくら河海のような深遠な哲理が論明してあるといえども、もし一切衆生が救済されないで、また一切衆生の救済主である釈迦世尊の根本が確實でなければ、それは一種の空理空論に不過するのである。

ここにいう二乗作仏の原理というのは、これがすなわち一切衆生悉皆成仏の原理である。二乗というのは声聞・縁覚をいうことで、爾前諸経においては、この二乗らは敗根腐種之機として作仏する余望がないと断定されたのである。

それではどのようにして敗根腐種という断定を受けたのであろうか。阿含経のような小乗教の説法だけを聴いていた小乗教徒たちは、ただ阿羅漢果を証得することで、最高目的をなすのみであり、仏果を証得

するような大志は全然抛棄する故に、このような小乘的固執を打破することが爾前諸経の目的であった。

換言すれば、法華実教に誘導する前段階的存在が即ち爾前諸経であったのである。それ故に、法華経に入ってくる前には、いまだあり得ない説法であるため、説かなかつたのである。そして仏陀出世の本懐上においても、また人生最大の目的の爲めにも、法華の説法はあるべきなのである。そこで、法華経に入ってきて、漸く一切衆生悉皆成仏、即ち二乗作仏の原理を説くことになったのである。

それでは二乗作仏の原理と何かが。それは一念三千の原理が即ちそれであり、法華経迹門十四品中、第二方便品に説かれている。即ち、経文に、

仏所成就の第一希有難解之法は、唯仏与仏が乃能究尽諸法実相するに、所謂諸法は、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末、究竟等である。〔『大正』九・五下〕

とあるのがそれである。この経文を指して古来より諸法実相の文、または十如是の文というのである。右の経文を経文通りにみるのでは、一念三千の理論があらわれないのである。しかし、支那の天台智者に依れば、この十如是の文が一念三千の基礎であり、一念三千が即ち諸法の実相であるというのである。一念三千の理論は元来智顛の学

説であるため、以下に論ずる実相章に譲ることにして、ここでは諸法実相の意義をまず考察することにした。

諸法というのは、世間と出世間の一切方法をいうことで、即ち差別的な諸現象、随縁の事相がそれであり、また実相というのは、諸法の真実なる体相をいうことで、即ち平等的な実在不変の理である。諸法と実相を分離して論ずればこのようであるが、しかし諸法を離れて実相があるのではなく、また実相を離れて諸法があるのではない。

『法華経玄義』卷八下に、

諸法は既是実相之異名であり、而実相之当体である。又実相は亦是諸法(之)異名であり、而諸法之当体である。〔『大正』三三・七八三中〕

としたのがこの意味を言ったのである。方便品に「是法住法位 世間相常住」〔『大正』九・九中〕ともある通り、ここに「是法」というのは、差別的な現象界の一切諸法を意味するのであり、また「法位」というのは、円融平等なる実相の位を意味するのである。即ち、諸法が実相の理位に住する故に、差別的な(世)間相そのままが常住不変するということである。日蓮の『諸法実相鈔』に「地獄は地獄の相をみせるのが実の相であり、餓鬼の相に変ずるのは地獄の実相ではない。仏は仏の相、凡夫は凡夫の相、万法当体の相が妙法蓮華経の当体(なり)とする」ことを諸法実相というのである。〔『定遺』七二五〕とした

のも、亦た是れ同一なる意味である。

ところで、天台智者は、この諸法実相の義、即ち諸法がすなわち実相であるという意義を具体的に論じたのが、即ち一念三千論である。

そして諸法実相の相というのは、客観的諸法の同体の理論であり、一念三千というのは、主観的に諸法の同体を理証することである。諸法の同体というのは、多言を要するまでもなく、理即事、事即理、現象即本体、本体即現象、事、物物の当相即体、当体全是を意味するこゝとで、これをもし主観的にみれば、仏陀即凡夫であり、凡夫即仏陀である。この凡即仏、仏即凡の原理が、即ち一念三千論である。

『開目抄』に「仏になること（「道」）は、華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪観等も、実に契合されるともみえない。但だ天台の一念三千こそ仏になる道であるとみえるに、この一念三千も我等一分の慧解もないが、しかし一代経の経中には、この経だけは一念三千の玉をいただいた。余経の理は玉のような黄石である。沙をしぼっても油が出てこず、石女に子息がないようなものである。諸経は智者もなお仏になるが、此の経は愚人も仏因を植えるに、解脱を求めないが、解脱は自ずと成ず」〔定遺〕六〇四〕として、一念三千をもって真実なる仏種としたのである。

このように一念三千の原理は、一代諸経中、ただ法華経方便品にだけあるというのが天台智者の卓見であり、またこの思想を継承して、二乗作仏の原理であることを鼓吹したのが、即ち日蓮である。

天台と日蓮がこのように主張するのは決して憶見ではない。方便品

に「諸仏如来 以方便方（「力の誤り」） 於一仏来（「乗の誤り」） 分別説三」〔大正〕九・七中〕とあったり、また「十方仏土中 唯一一乘法 無二亦無三」〔大正〕九・八上〕とある経文に依って主張するのである。即ち、仏陀が法華以前の諸経において三乗があると説いたのは、方便としてそのように言ったのであり、出世の本懐を発表する法華経に至っては「正直捨方便 但説無上道」〔大正〕九・十上〕とするに、そのいうところの無上道というのは、即ち一切衆生が悉皆成仏するという成仏道を教えるのである。

仏陀が「諸仏世尊はただ一大事因縁の為に世上に出現されたところ、その一大事因縁というのは、欲令衆生開仏知見して、欲示衆生仏之知見して、欲令衆生悟仏知見して、欲令衆生入仏知見道する」ということをいうもので、これが所謂四仏知見ということである。これは要するに、如何にすれば一切衆生をして悉く仏道を成就せしめようか、いな、成就させる為めに出世されたということで、その仏道を成就させるための原理が、即ち諸法実相、一念三千である。

第三項 釈尊の本源

釈尊は三十五歳の時に成道した後、四十五年間、教化生活をなされるに、此の間に説法した内容に関して、天台智者は、華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃等の経を順次に説いたとして、これを五時教とす。そして前述した通り、法華経には本迹二門（「本迹相對」）がある

とする。ところで、法華經の本門以前までの諸經を説いた仏陀は、これを迹仏と称して、本門を説いた仏陀は、これを本仏と称して區別する。

それでは本迹の意義は何か。迹は垂迹の義であり、本は本地の義にして、これは釈迦牟尼仏の本源に関する問題である。

もし天台の意思に依って釈尊を歴史的にみれば、伽耶城において成道した後、四十余年間、華嚴、阿含、方等、般若等の諸經を説いたこと、これは従浅至深の順序である。このような順序を取ったのは、聴法衆生たちの根機に順応したからで、すでに般若經の説法を聴いた大衆たちは、その根機が調熟されて真実教である法華の説法を聴聞する実力がある(「具わる」)ようになったのである。

そうして法華会上において釈尊は、爾前諸經の説法時では敗根腐種として弾訶した二乗らに対して皆な悉く成仏すると許されるに、これが所謂会三帰一、または開權顯実と称するもので、法華経迹門十四品の要旨はこれにあるのである。

これまで釈尊といえは、伽耶近成の仏陀であると釈尊自身も自ら説いたのであり、他人もまたそのように知っていたのである。それであったことが、本門に至っては、伽耶近成の新仏ではなく、久遠実成の古仏であると、その本地本源を明かすに、これが即ち発迹顯本、開近顯遠ということ、晴天の霹靂のように難信難解なる一大宣言である。したがって、寿命品においても三誠三請(「『大正』九・四二中」の鄭重なる形式を取って、これを宣言したのである。

今、如来寿命品所説の要旨を紹介すれば、それは次のようである。

「釈尊が自ら言われるには、「一切世間の天人(及び)阿修羅等が皆な想うに、釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること不遠にして、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得た」と、しかし其の実はそのようなことではなく、我れは実に成仏してより無量無辺百千万億那由他劫にして、これを譬喩すれば、五百千万億那由他阿僧祇の三千大千世界を、仮使有る人が壊して微塵と作して持つて東方へ五百千万(億)那由他阿僧祇の国を過ぎてここに一塵を落として、このように東行しながらこの微塵が尽きたとすれば、その世界の数を可く計量し得ようかとすれば、それは我々の凡智としては知り得ないのみならず、声聞と辟支仏の無漏智をもつても能く思惟し得ないところであり、また不退転の地位、即ち初地以上の菩薩たちもなお知り得ない数である。のみならず、この諸々の世界、即ち微塵が落ちた世界や落ちていない諸々の世界をまたさらに微塵と作して、微塵をして一劫にすれば、我が成仏したのは、この数よりも超過すること、実に百千万億那由他阿僧祇にして、我れはそれ以来に、この娑婆世界に常住しながら衆生を教化して、また余処の百千万億那由他阿僧祇の国においても衆生を教導利益してきているさ中である。……このように我れは成仏してより甚大久遠であり、寿命が無量にして阿僧祇劫を常住不滅する。我れが本来、菩薩道を行じて成ぜしところの寿命は、今もなお尽きないのみならず、さらに上述した数にも倍加するのである」と、このようになことが開近顯遠なる釈尊の寿命説である。即ち、伽耶近成の釈尊は迹

仏であり、寿命品に発迹顕本された仏陀は前仏を垂迹した久遠本仏である。

寿命品所顕の仏身を古来よりのようにみてきたか。印度の世親は、彼の著『法華論』に、応化身、報身、法身の三身が具足しているとみたのである。⁽²⁸⁾

もし寿命品にその根拠を探ってみれば、「非如非異。不如三界見於三界之相」⁽²⁹⁾『大正』九・四二下」とあるのは、偏如を排斥して円如を顕現するのであるから、これは法身の義に。「又如來如實知見三界之相」⁽³⁰⁾『大正』九・四二下」としたのは、如如の智が如如の境に契合することを示すのであるから、これは報身の義に。「又或示已身已事。或示他身他事」⁽³¹⁾『大正』九・四二下」としたのは、応身の義に。各各該当するのであるとみることができる。⁽³²⁾

もし三身寿命の長短をみれば、化身仏の数（「壽の誤り」）量は有始有終である。それは二乗人のために王宮に現生して乃至双林に示寂する等、八相成道の相をみせるからである。報身仏の寿命は有始無終である。何故ならば、經文に「身（「我本の誤り」）行菩薩道。所成壽命。今猶未盡」⁽³³⁾『大正』九・四二下」とある通り、因行円満にして初めて仏果を証する故に有始であり、一度証得した仏果は湛然不滅するのであるため無終である。法身仏の寿命は無始無終である。それは不生不滅するのであるからである。⁽³⁴⁾

それでは寿命品所顕の正義は何身にあるか。この問題に対して天台家と日蓮は意見を異にする。

天台の仏身観

もし天台宗第六祖である妙楽の意見（「天台智者大師説の誤り」）に依れば、「正在報身」というのである。「何故ならば、このようにみるのが義便文会するからであるという。義便というのは、報身の知慧は、上には法身の理に冥合して、下には応身の用に契当して、三身が宛然具足するからであるという。その次に文会というのは、經文に「我成仏已來甚大久遠」⁽³⁵⁾『大正』九・四二下」としたのである。それ故に、能く三世に衆生を利益するに、所成は即ち法身であり、能成は即ち報身に於いて、この法報が合すれば、即ち応身があらわれ、能く衆生を利益するに、これより推してみれば、寿命品の正義は報身仏の功德を論ずるところにある」⁽³⁶⁾『妙法蓮華經文句』『大正』三四・一二九上」というのである。

以上のような三身を、もし本迹に区分してみれば、応身は迹仏であり、法報二身は本身（「本仏の誤り」）である。即ち応身は伽耶近成であり、法報二身は久遠実成である。

このようにみれば、三身が各別して彼此が甚だ相異なるもののように聞こえる。しかし、「非迹ならば、無以顕本なるに、本迹が雖殊なるも、不思議は一」⁽³⁷⁾と解釈する通り、三身は一体不離の關係にある。即ち応身は迹仏であり、法報は本仏であるというが、甚大久遠なる本仏の垂迹したのが法身（「応身の誤り」）であるため、この応身もまた甚大久遠となるのである。このように発迹顕本、開迹顕本すれば、三身

が皆な久遠であるとみることが論理上当然である。三身共に久遠甚大なることを、本時の三身または無作三身というのである。

日蓮の仏身観

それでは日蓮は、この寿量品所頭の仏身をどのようにみたのであろうか。これに関しては文上、文底に分けてみている。経に「然我実成仏已（『已の誤り』）來。過五百塵点劫」（『大正』九・四二下）とあるのは、その仏寿が、有始無終なる始覚如來とみるに、これは文上の義である。これに対して文底というのは、この経文の奥底に深蔵された深義を発見したことをいうもので、それを無始無終、本覚無作の本仏であるとする。

『授職灌頂口伝鈔』に「この三身は、たとい無始本覚の三身ではあるも、暫時、五百塵点劫の成仏を立てる」（『定遺』八〇一）とした通り、寿量品の文上からみれば、五百塵点劫の前に実成した仏であるために、有始であるとしなければならぬのである。しかし、其の実は無始本覚の本地三身なることを五百塵点劫という譬喩に寄せて無始の義を表現するというのである。

このようにみてくると、天台の三身と日蓮の三身観の間に、その相異点を発見するところがないようにもみえる。即ち、天台家においても本有の無作三身であるとし、日蓮もまた本有の無作三身であるというに、何が相異なる点であるうか。古來より竹膜之隔⁽⁴⁾としたのも、この点を指称するのである。

今、一言でその相異点を指摘すれば、天台は文上に立脚した理論の三身論であり、日蓮は文底に立脚した事上の三身論である。

即ち、天台は五百塵（点）劫という経文に依拠して、仏身の中心を報身に置き、この報身が中間において、常住する法身に上冥して、無常なる応化身に下契する智慧に依って、無作三身を論ずるのである。

しかし日蓮は、そのような経文に拘束されることなく、その文底に秘沈された本有無作三身の實事に立脚して、三身が皆な無始無終、本有無作常住不滅するものであると論ずる。即ち法身は本有無作の本体であり、報身は本有無作の智性であり、応身は本有無作の慈相であるとみるのである。

天台は寿量品開頭が報身にあるのに対して、日蓮はむしろ応身常住にあるとみるのである。

日蓮はこのようにその思想の根柢を法華経の本門寿量品に置いて、これにより一代藏経を評論して、またその信仰を樹立している。

『開目抄』に「迹門方便品は一念三千、二乗作仏を説いて、爾前二種の失の一を脱したのである。しかし、いまだ発迹顕本しなければ、真実なる一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらないのである。水中の月をみるようなもので、根のない草が波上に浮かぶようなものである。本門に至り「始成正覚が破られれば、四教の果を破る。四教の果を破れば、四教の因が破られる。爾前迹門の十界の因果を打破して、本門の十界の因果を説きあらずに、これが即ち本因本果の法門である」（『定遺』五五二）とした通り、本門の久遠本仏の開頭がなければ

ば、迹門所談の二乗作仏の原理である一念三千説も一種の空理空論に
不過するということであるに、その理由は、久遠本仏は、この一念三
千の理の実証者であり、またその本源であるからである。

また『開目抄』に「このようにして回顧すれば、華嚴經の台上十方、
阿含經の「小」釈迦、方等、般若、金光明（經）、阿弥陀經、大日經等
の権仏等は、この寿量仏の天月が、暫時、影を大小の器にうつつたの
を、諸宗の学者等は、近くは自宗に迷い、遠くは『法華經』の寿量品
を知らずに、水中の月に実月の想いをなし、或いは入って取ろうとし、
或いは縄でしばろうとする。天台云わく「天月を不知して、ただ池月
だけを見る」⁽⁴²⁾⁽⁴³⁾」「『定遺』五五二―五五三」等としたことに依って、日
蓮の仏身觀を窺い知るのである。

〔下に続く〕

註

- (1) 金東華博士の來歴については、金東華著・李光雨編『雷虛金東華博士の
仏教思想と実践』（正覺寺、二〇〇一年）所収の「雷虛金東華博士年譜及び
著作目録」（二〇〇―二一四頁）を参照されたい。
- (2) 立正大学編『立正大学一覽 昭和七年三月一日現在』（立正大学、一九三
二年）に「立正大学 専門部／昭和三年三月卒業（七十五名）／○宗教科
／二種生／金東鎮 朝鮮」（二二三頁）と、立正大学編『立正大学一覽 昭
和十七年度』（立正大学、一九四二年）に「立正大学 学部／昭和七年三月
卒業／○宗教学科／（聴講生）金東鎮 朝鮮」（二二〇頁）とある。
- また、立正大学同窓会名簿作成委員会編『立正大学同窓会會員名簿 昭和
四十三年七月』（立正大学同窓会本部、一九六八年）に「専門部／昭和三年

三月卒業／宗学（「教の誤り」科／○金東華（東鎮） 朝鮮尚州郡尚州面書
谷里村 東国大学校文化研究所長」（七五頁）と、「文学部／昭和七年三月
卒業／宗教学科／金東鎮 朝鮮慶尚北道尚州郡圖書谷里 東国大学校文化
研究所長」（一二二頁）とある。その他、本書所収の「卒業生索引」には「金
東鎮 専歴地（「立正大学専門部歴史地理科」 昭一〇）（三七五頁）」とい
う記載もみえるが、該当項目からは見当たらず、立正大学同窓会名簿作成
委員会編『立正大学同窓会會員名簿 一九七八年版』（立正大学同窓会本
部、一九七九年）所収の「卒業生索引」（四七一頁）では、これを挙げない
ために単なる誤記のようである。

なお、金光植編『一九〇〇―一九九九 韓国仏教一〇〇年 朝鮮・韓国仏
教史図録』（皓星社、二〇一四年）に収録されている「二一五 東京朝鮮仏
教留學生の卒業生送別記念（一九二七年三月）」（一〇八頁）と題する写真
の中に金東鎮が写っているが、写真では僧侶の身なりではない。確かなこ
とはいえないが、「金東華」「金東鎮」については、同名異人の可能性を含
めて再考の余地があると考えられる。

(3) 前掲の『立正大学一覽 昭和十七年度』に「金東鎮（研究主題）法相（留
学地）奈良（期間）自昭和七年四月至昭和十年三月」（二〇四頁）とある。

(4) 前掲の三友論文では「立正大学一覽 昭和十三年度」によると、「仏教
学」を担当している」（二八三頁）と指摘しているが、本誌は筆者未見であ
る。これが前掲の『立正大学一覽 昭和十七年度』所収の「前教職員／一、
教員」の項目（一一三―一一七頁）からは、その名が見当たらない。

(5) 諸点淑「近代韓国仏教の「親日―抗日」の言説——「立命館文学」第六六〇号、二〇一九年）
日」をめぐる意味的多様性——」（『立命館文学』第六六〇号、二〇一九年）
五二五―五二六頁参照。

(6) 諸点淑「植民地近代という経験——植民地朝鮮と日本近代仏教——」（法
藏館、二〇一八年）一一〇―一一一参照。

(7) 身延山学園同窓会本部編『身延山学園同窓生名簿 平成九年版』（身延山
学園同窓会本部、一九九七年）の「昭和四年度」の項目に「方哲原（大韓民

- 国」(四頁)とある。方哲源師については別稿にて詳述することにした。
- (8) 前掲の『立正大学一覽 昭和七年三月一日現在』(八四—九三頁)によると、立正大学の学部及び立正大学専門部において「天台学」「日蓮学」「法華経教学史」を担当していたのは、磯野本精教授、片山隨英教授、北尾啓玉教授、小林是恭教授、清水龍山教授、高田恵忍教授、望月歡厚教授、岩田教圓講師、布施浩岳講師、山川智應講師である。
- (9) 『諫暁八幡抄』「我弟子等がをわく、我が師は法華經を弘通し給としてひろまらざる上、大難の來は、眞言は國をほろぼす・念佛は無間地獄・禪は天魔の所爲・律僧は國賊との給ゆへなり。」(『定遺』一八四五) 参照。
- (10) 『開目抄』「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」(『定遺』六〇一)。
- (11) (丸括弧) は著者による補い。但し、木村中一教授によると、宮崎英修編『日蓮辞典』(東京堂出版、一九七八年)の「四大法難」の項目にも「文応元年(一二六〇)八月二七日の松葉谷法難、弘長元年(一二六一)五月二日の伊豆法難、文永元年(一二六四)一月一日の小松原法難、文永八年(一二七二)九月二日の竜口法難(佐渡流罪)」(一二二頁)とあるように、四度目の法難については「龍口の斬首難」にした方が適切であろうという。
- (12) 『開目抄』「既に二十餘年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聽聞の俗人など來て重科に行る。謀反などの者のことし。」(『定遺』五五七)。
- (13) 木村中一教授によると、この五大部の順序は『録内御書』のそれであるため、著者が何をもって御書を拜読したか、ということが窺い知られるという。詳しくは、木村中一「近世刊本『録内御書』の書誌学的研究」(『大学院年報』第二十号、二〇〇二年)等を参照されたい。
- (14) 湛然述『法華玄義釈籤』卷第十九「自云始成。存行布故。仍未開權。言始成故。尚未發迹。此之二義。文意之綱骨。教法之心髓。」(『大正』三三・九五〇下) 参照。
- (15) 『開目抄』「華嚴乃至般若・大日經(等)は二乗作佛を隱のみならず、久遠實成を説かくさせ給へり。此等の經々に二の失あり。一には存行布故仍未開權。迹門の一念三千をかくせり。二には言始成故未發迹。本門久遠をかくせり。此等の二の大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり。」(『定遺』五五二)。
- (16) 「方便品第二」佛所成就第一希有難解之法。唯佛與佛乃能究盡諸法實相。所謂諸法如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。」(『大正』九・五下)。
- (17) 金東華『佛教學概論』(寶蓮閣、一九八四年)の第二篇第五章所収の「第四節 諸法實相論」(三八—四〇六頁) 参照。
- (18) 『妙法蓮華經玄義』卷第八下「諸法既是實相之異名。而實相當體。又實相亦是諸法之異名。而諸法當體。」(『大正』三三・七八三中)。
- (19) 「方便品第二」是法住法位 世間相常住」(『大正』九・九中)。
- (20) 『諸法實相鈔』(真偽未決・木村中一教授による)「地獄は地獄のすがたを見せたるが實の相也。餓鬼と變ぜば地獄の實のすがたには非ず。佛は佛のすがた、凡夫は凡夫のすがた、萬法當體のすがたが妙法蓮華經の當體也と云事を諸法實相とは申也。」(『定遺』七二五)。
- (21) 『開目抄』「又佛になる道は華嚴唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も實には叶べしともみへず。但天台の一念三千こそ佛になるべき道とみゆれ。此一念三千も我等一分の慧解もなし。而ども一代經々の中には此經計一念三千の玉をいだけり。餘經の理は玉ににたる黃石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸經は智者猶佛にならず。此經は愚人佛因を種べし。不求解脫解脫自至等(云云)。」(『定遺』六〇四)。
- (22) 「方便品第二」諸佛以方便力。於一佛乘分別說三。」(『大正』九・七中)。
- (23) 「方便品第二」十方佛土中 唯一乘法 無二亦無三」(『大正』九・八上)。

(24) 「方便品第二」 「正直捨方便 但說無上道」 (『大正』九・十七)。

(25) 「方便品第二」 「諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故出現於世。諸佛世尊。欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世。欲示衆生佛之知見故出現於世。欲令衆生悟佛知見故出現於世。欲令衆生入佛知見道故出現於世。」 (『大正』九・七上) 參照。

(26) 森章司「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」 (『中央學術研究所紀要』モノグラフ篇No.1、一九九七年) 一二二頁參照。

(27) 「如來壽量品第十六」 「爾時世尊。知諸菩薩三請不止。而告之言。汝等諦聽。如來祕密神通之力。一切世間天人及阿修羅。皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮。去伽耶城不遠坐於道場。得阿耨多羅三藐三菩提。然善男子。我實成佛已來。無量無邊百千萬億那由他劫。譬如五百千萬億那由他阿僧祇三千大千世界。假使有人末爲微塵。過於東方五百千萬億那由他阿僧祇國。乃下一塵。如是東行盡是微塵。諸善男子。於意云何。是諸世界。可得思惟校計知其數不。彌勒菩薩等俱白佛言。世尊。是諸世界無量無邊非算數所知。亦非心力所及。一切聲聞辟支佛。以無漏智。不能思惟知其限數。我等住阿惟越致地。於是事中亦所不達。世尊。如是諸世界無量無邊。爾時佛告大菩薩衆。諸善男子。今當分明宣語汝等。是諸世界。若著微塵及不著者。盡以爲塵一塵一劫。我成佛已來。復過於此百千萬億那由他阿僧祇劫。自從是來。我常在此娑婆世界說法教化。亦於餘處百千萬億那由他阿僧祇國導利衆生。……如是我成佛已來甚大久遠。壽命無量阿僧祇劫常住不滅。諸善男子。我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡復倍上數。」 (『大正』九・四二下) 參照。

(28) 「妙法蓮華經憂波提舍」卷下「二者示現應佛菩提。隨所應見而爲示現。如經皆謂如來出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得成阿耨多羅三藐三菩提故。二者示現報佛菩提。十地行滿足得常涅槃證故。如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故。三者示現法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變等義。如經如來如實知見三界之相次第乃至不如三界見於三界故。」 (『大正』二六・九中) 參照。

(29) 「如來壽量品第十六」 「非如非異。不如三界見於三界。」 (『大正』九・四二下)。

(30) 「如來壽量品第十六」 「如來。如實知見三界之相。」 (『大正』九・四二下)。

(31) 「如來壽量品第十六」 「或說己身或說他身。或示己身或示他身。或示己事或示他事。」 (『大正』九・四二下)。

(32) 「妙法蓮華經文句」卷第九下「文云。非如非異非如三界見於三界。此非偏如顯於圓如。即法身如來義也。又云。如來如實知見三界之相。即是如如智稱如如境。一切種智知見即佛眼。此是報身如來義也。又云。或示己身己事。或示他身他事。此即應身如來義也。」 (『大正』三四・二八中) 參照。

(33) 「如來壽量品第十六」 「我本行菩薩道所成壽命。今猶未盡」 (『大正』九・四二下)。

(34) 吉藏撰『法華義疏』卷第十「所言如來壽量者。依法華論三種如來。一者化身如來。二報身如來。三法身如來。壽量亦有三種。化佛壽量有始有終。故爲二乘人八相成道王宮現生雙林示滅也。二報身佛壽量有始無終。故下文云。我本行菩薩道所成壽命今猶未盡。以行因滿初證佛果是故有始。一證已後湛然不滅。故無有盡終。三法身佛壽本自在之不生不滅無始無終。」 (『大正』三四・三上) 參照。

(35) 「如來壽量品第十六」 「我成佛已來甚大久遠。」 (『大正』九・四二下)。

(36) 「妙法蓮華經文句」卷第九下「此品證量通明三身。若從別意正在報身。以故義便文會。義便者。報身智慧上冥下契。三身宛足故言義便。文會者。我成佛已來甚大久遠。故能三世利益衆生。所成即法身。能成即報身。法報合故能益物故言文會。以此推之正意是論報身佛功德也。」 (『大正』三四・二九上)。

(37) 僧肇「維摩詰經序」 「非本無以垂迹。非迹無以顯本。本迹雖殊而不思議一也。」 (『大正』五五・五八中) 參照。「妙法蓮華經文句」卷第九下 (『大正』三四・二九中)、吉藏撰『法華玄論』卷第十 (『大正』三四・四四七中) 同文。

(38) 「如來壽量品第十六」 「然我實成佛已來久遠若斯。」 (『大正』九・四二下)。

一部改変か。

(39) 『授職灌頂口伝鈔』(偽書・庵谷行亨博士による)「此三身者雖無始本覺三身 且立五百塵點劫成佛。」(『定遺』 八〇二)。

(40) 『如来滅後五百歲始觀心本尊抄』(以下、『觀心本尊抄』)「論其教主非始成正覺釋尊。所說法門亦如天地。十界久遠之上國土世間既顯。一念三千殆隔竹膜。」(『定遺』 七二四) 参照。

(41) 『開目抄』「迹門方便品は一念三千・二乗作佛を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯す。此即本因本果の法門なり。」(『定遺』 五五二)。

(42) 『妙法蓮華經玄義』卷第七上「如不識天月。但觀池月。」(『大正』 三三三・七六六中) 参照。

(43) 『開目抄』「かうてかへりみれば、華嚴經の臺上十方・阿含經の小釋迦、方等・般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の權佛等は、此壽量の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の學者等近は自宗に迷、遠は法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入て取んとをもひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云 不識天月但觀池月等(云云)。」(『定遺』 五五二―五五三)。

〈付記〉

翻訳原文は、一九八四年に寶蓮閣で出版された六版(二九七―三二〇頁)を使用した。

本節における誤字・脱字・語句の誤りほか、訳注者による補足等は、訳文中に「亀甲括弧」をもって指摘した。但し、次に列挙する同様にして複数みられる誤植については、ここに一括して指摘しておくことにしたい。即ち「宜」は

「宜」に、「那由陀」は「那由他」に、「阿僧祇」は「阿僧祇」に、「曼荼羅」は「曼荼羅」に訂正した。その他、読みやすくするために、訳注者の任意により、適宜、句読点や改行を施した。

本書には、訳注者が訳文中において見出しとして採用している頭注(＝五大部分書など)があるのみで、脚注はない。そのため、著者の原典からの引用文に關していえば、典拠があつたりなかつたり、またはその範囲が明確でなかつたり、時には地の文として採用されている例もあつたりして、多少の不備が認められる。

このような不備に対して本訳注では、管見の及ぶ限りにおいて、これらを精査して、訳文中に引用文の典拠を補うと共に、注をもって対応する原文を明示することによって、引用文と原文との比較対照ができるようにした。なお、その過程において確認できた引用文の不備(一部改変を含む)についてもこれを指摘しておいた。この点は、著者の原典に対する引用態度や理解度を窺う上で、尺度となり得るために注目すべきであろう。さらに、日蓮教学の専門家にとつて引つかかるところ、例えば「念力」という表現なども、著者の思想基盤を論及する上で、参考になるものと考えられる。

最後に、本稿に対するネイティブチェックは、立正大学仏教学部を退職されてからすぐに本学においてになり、今なお第一線において日蓮教学を教授されている庵谷行亨博士と、身延山久遠寺の西谷宿舎において筆者と長年苦楽を共にしている木村中一教授に手間をかせさせてしまったのである。ただ「日本語の文章として多少無理がある」と指摘されたところであっても、著者の意に背かぬよう原文通りに訳したところもある。また両先生からは、偽書・真偽未決の遺文に関するご指摘など、様々なご教示を頂戴することができた。ここに記して深く御礼申し上げる次第である。

〈キーワード〉五重相對、二乗作佛、諸法實相、一念三千、本迹二門、伽耶近

成、久遠実成、無作三身、大曼荼羅、三大秘法、金東鎮、方哲源、李光雨